

コーヒーブレイク



Jazzと寓話と

私がJazzを演っていたことを東弁事務局のSさんたちに話していたところ、この欄の書き手を探すのに苦労するからといって、書かされる羽目になった。たぶん読んでも面白くないと思うので、読み飛ばしていただきたい。

●●●
高校時代、酒、煙草、コーヒーと並んで、Jazzには大人の香りがした。まだ東京にもJazz喫茶がたくさんあり、今は信じられないかもしれないが、皆、一生懸命音楽を聴いていた。例えば、代ゼミに近い代々木教会の地下の「モーヴ」という店では、ちょっとでもお喋りをすると、痩せた女の店員が近づいてきて、口に人差し指を当てるのであった。私は、そんな風なJazz喫茶に通い、高3の文化祭では自分たちでJazz喫茶を開いた。必死で準備して徹夜が明けた朝、友人と聴いたキース・ジャレットの「ザ・ケルン・コンサート」は、今でも忘れられない。

●●●
大学では、アルトサクスを買い、ずっとバンドに明け暮れた。いわゆる業界用語で「ピータ」(旅)という演奏旅行にも行った。昔は学生に優しい店が特に地方にたくさんあって、学生のバンドにもギャラを払ってくれた。私の次の年にピータに行ったレギュラーバンドのピアニストは、二弁の新谷桂弁護士で、彼とはよく一緒に演奏したものだ。

●●●
Jazzは、今はそれほど流行らない音楽で、実を言うと、私も現在は特に夢中になって聴いたりしてはいない。私は、Jazzの良さは、旧き良きアメリカの良さであると思っている。虐げられていた黒人たちが自由を獲得していく過程において深化したという歴史的な側面があるのみならず、決まりごとはテーマとリズムとコード(和声)進行だけで、各人が他人の音も聴きながらインプロヴィ



会員
増岡 研介<41期>

ゼーション(即興演奏)を行なうという様式の側面においても、「自由」という思想を最も体現した音楽ではないかと思う。今、そのような「自由」の音楽が行き詰まっているように思えるのは、現在のアメリカや世界の状況と無関係ではないように思われる。

●●●
とは言え、私も、昔の仲間とセッションをするのは嫌いではなく、ごくたまにスタジオで練習したり、客のあまり来ない不思議な店で演奏したりすることがある(写真は、例外的に客の多い店で行なったときのもの)。自由な音楽であるJazzは、ある種のいい加減さも許容するので、曲を知っていれば見ず知らずの他人同士でもセッションができるし、昔の仲間であれば、なおさら楽しいものである。ただ、昔は下手だった後輩の連中などが、ずっとプレイを続けてきた結果、私などよりも上手くなってしまっているのを見ると、つくづくウサギとカメの寓話は正しいと思い知らされる。私はこれでも、学生バンド大会で最優秀プレーヤー賞をとった程度には上手かったはずなのだが。

●●●
このようなJazzの寓話により、私は、現在、せめて弁護士としては、毎日毎日カメのように精進して行こうと考えている。継続は力なりと言うが、継続以外に力の源泉など存在しないのではなからうか。